

馬琴作
國出画

野

鳥

人

新編

西葉下

舟良



13
1969
/



馬琴作

新篇金瓶梅

第一輯

至正新故
國安畫



特
13
1969
1



金瓶梅一百回清の康熙乙亥の故齋謝頤の序
 又鳳洲の手集ともいへば彼書は演じての則宋の巨匠西門啓の一期
 嬉笑の語説也その九友應伯爵ホと玉皇廟小義と結ぶる用場もあつた
 この時武松が景陽岡を虎と搏する風声あつた併主波金蓮は武植
 毒を毒殺の面三回則水許と同志と易る処も有り畢竟水許の西門啓と
 金蓮が奸通の毒悪の談と父母ととを伴設する但武松が復讐の一條の第
 八十七回在り是より先西門啓の胡製の房藥通飲と遂の身と要緊第
 七十七回在り是武太郎と藥鴉せし悪報との張竹坡の評論の金瑞が水
 滸傳の外書批評の做ひる因て勸懲の傳會と勉て作者と資はめ
 る彼書の宣淫道に懲るる君臣父子の間を讀むを成るる所との言くあり考
 へる唐山の書賈ホ水滸西遊三國演義と金瓶との四大奇書とを
 願ふ所の佳妙ると猥褻時好の稱へるる事せり視之と流るる趣



向の國俗の浮世物真似とのゆゆのゆゆの條理の二箇も彼の乱朝悪
 俗の情態をより寫せの彼書舶來せよ以來書名漸々此間の高
 りあどりの雅俗口その書名を知ざる得て讀めあると稀に見る彼
 書中の方方言洒落のゆゆのゆゆもある且通俗の譯文も彼の俗語
 疎の讀ね知らぬ論白の彼書も縁で戯れ今這策子と甚
 ちも敢鳳洲の類尊の做るまの編發端八巻のごたの素より彼書も死所
 咸予が意近ゆ生る是是より下もその猥褻の甚しに刪去を易るは善の
 話説を以ての取の取の取を取りのちうの所を放下して別の新研を遂げ
 の也この故の翻案筆削總之傾城水滸傳と同トくも具眼の看官知
 音の諸君子甘一鹹を舌嘗く作者の用意を知るとあつた亦九二冊
 子とのてをたとなく和漢との差ある我のらん

文政十四年辛卯春正月吉日新鐫 曲亭馬琴自叙





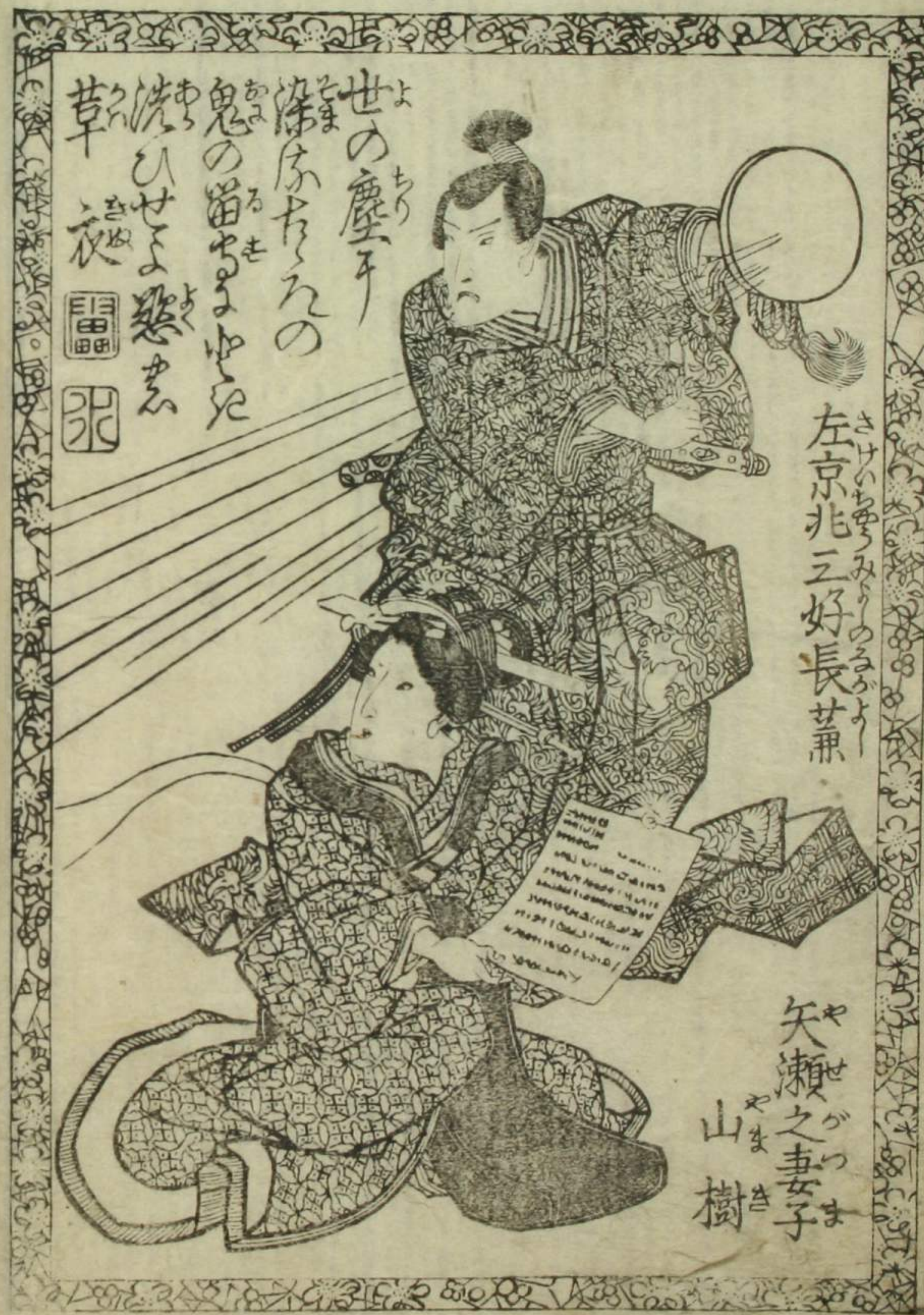
大原武具藏

世の塵子
 深衣たるの
 鬼の笛ちよん死
 洗ひせよ慈心
 草一夜

大原之妻子
 折羽



全海海第一集

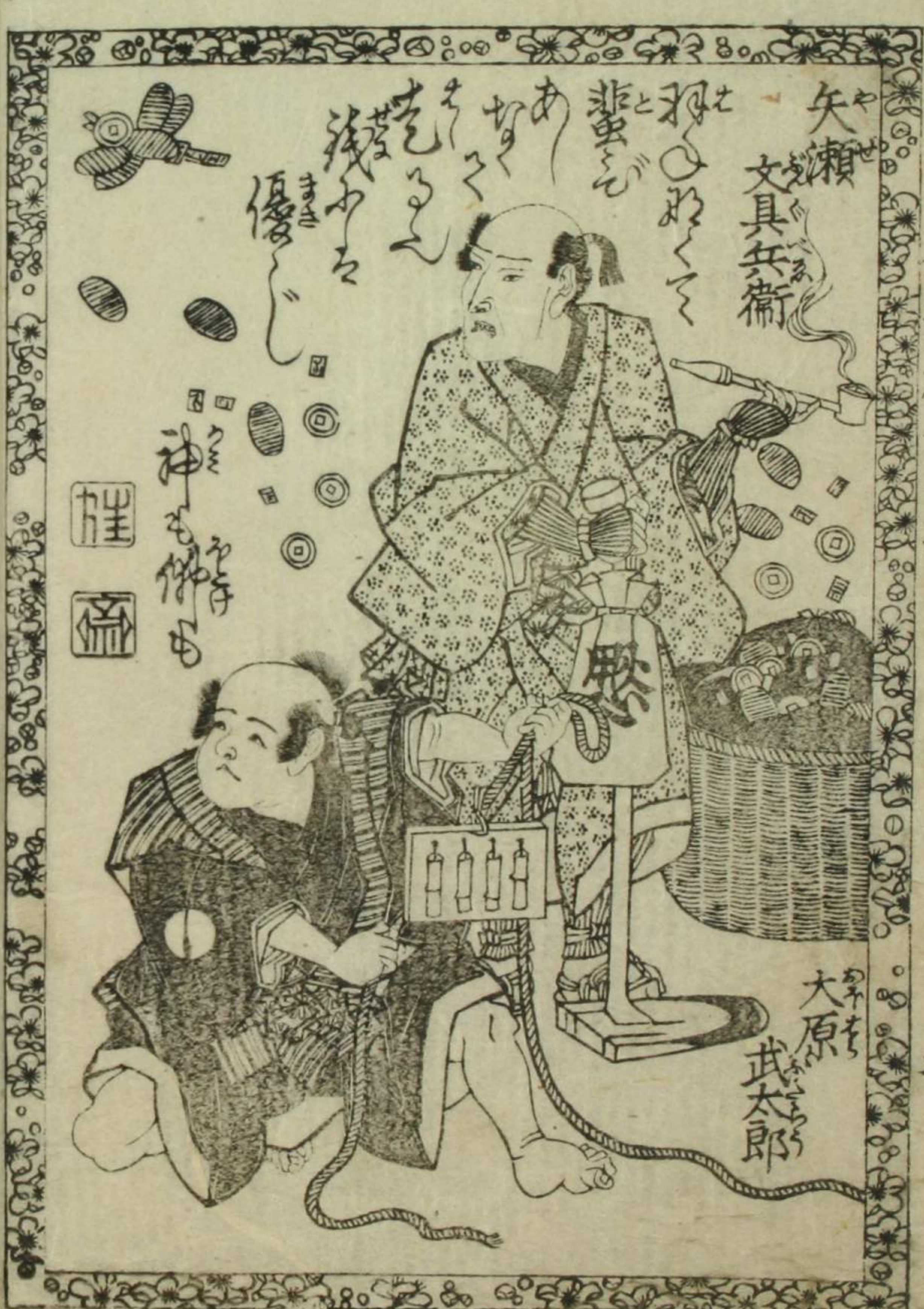


左京北三好長兼

矢瀬之妻子
 山樹

世の塵子
 深衣たるの
 鬼の笛ちよん死
 洗ひせよ慈心
 草一夜





虎平搏
 怨心を
 復せ
 後
 片の
 名を
 あげ
 今
 本公



小
 厩
 武
 松

主
 管
 横
 六

頼
 朝

人
 魂
 乃
 左
 遠
 那
 流
 君
 平
 止
 度
 武
 登
 母
 襲
 奈
 安
 宅
 志
 下
 之
 衣
 之
 通
 魔



望
 月
 五
 紋
 次

望
 月
 之
 妻
 子
 沖
 見

愚
 亮



江戸流行料理通 八百善主人著
初編ヨリ三編マ三冊

料理早指南 初編ヨリ四編迄共四冊

日本名所繪 鐵形蕙荳筆
唐紙一技摺

比翼效音氣地競 國貞画
全三冊

唐金應丹 調合有玉堂製
一服代二夜半服代一夜

插花早指南 初編一冊
二編一冊

鏡山故郷錦繪 全三冊

劇場觀頭微鏡 國貞画
全三冊

本 書物 芝神明前
地本 甘泉堂
問屋 和泉屋市兵衛

江戸流行料理通の八百善主人著の料理の秘訣を述べた書物である。初編から三編まで三冊に分かれている。料理の早指南は、料理の基本的な手順や材料の扱い方を詳しく説明している。日本名所繪は、鉄形蕙荳筆で描かれた名所の風景画である。比翼效音氣地競は、国貞画による三冊の絵巻物である。唐金應丹は、調合有玉堂製の薬で、一服代二夜半服代一夜の用法がある。

本は、書物、芝神明前、地本、甘泉堂、問屋、和泉屋市兵衛の情報が含まれている。これは、この書籍の流通経路や販売場所を示している。

馬琴作

新篇金瓶梅

第一輯

文政十四新板
國安画



芝神明前
泉市版

武

曲亭馬琴著

每編八弓合本四冊辛卯孟春印發

自是上著
大原新田

飾故御錦做二色黑白立地見京兆明斷

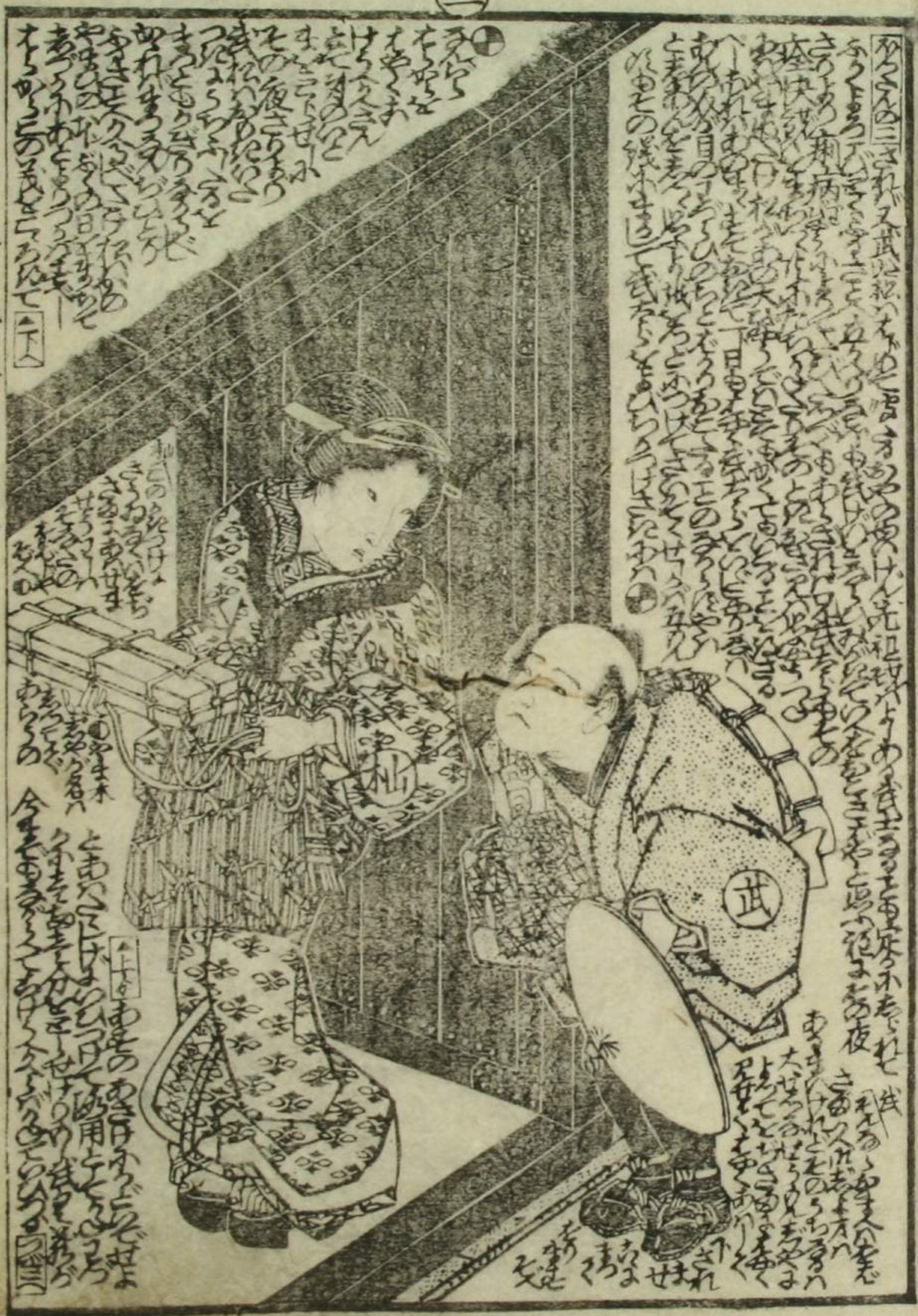
新篇金瓶梅第一輯之二

從此下者
條部舊迹

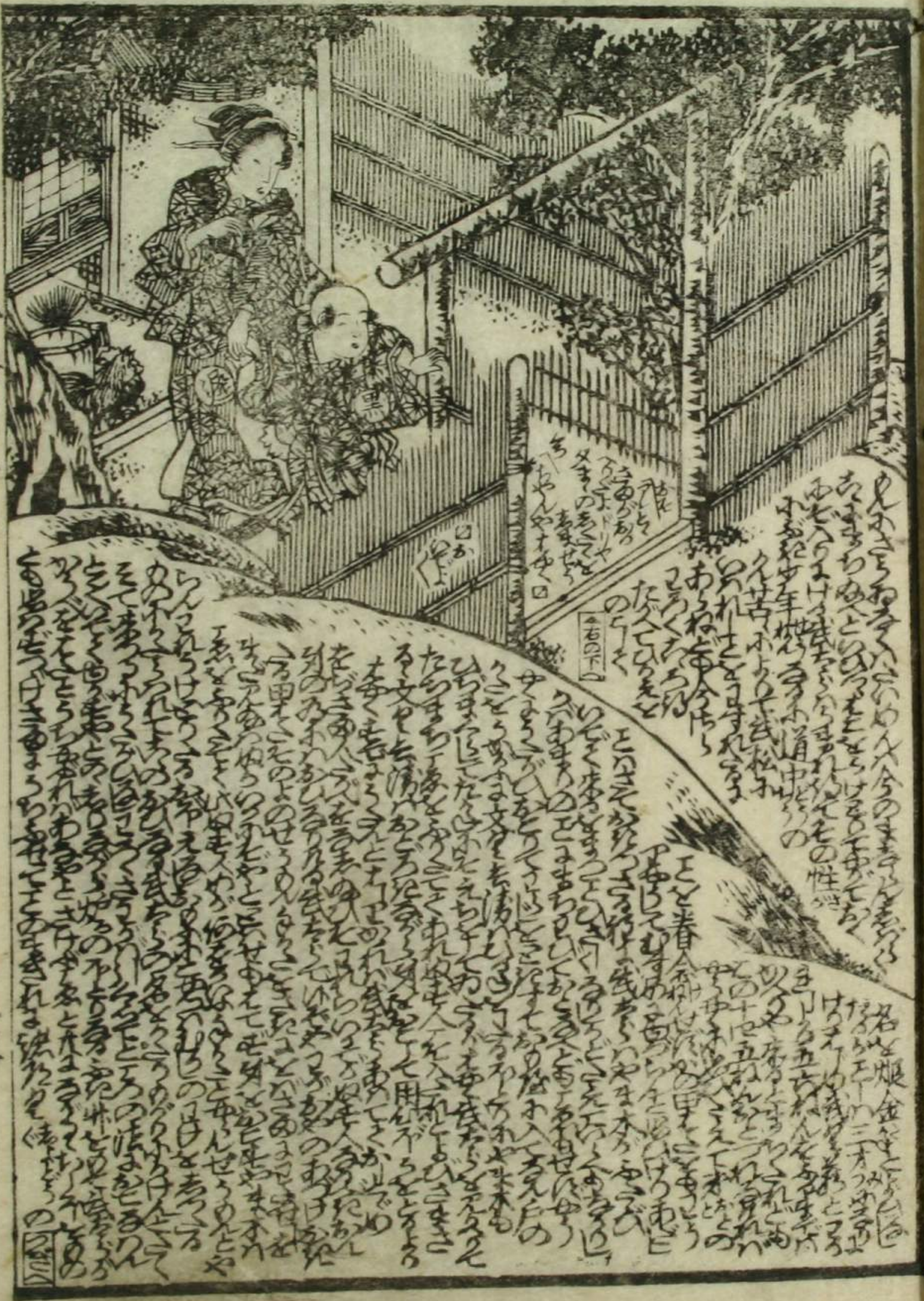
倒所親金為焦根榮枯倏忽變疾瀆薄命

歌川國安畫

江戸芝神明前書肆和泉屋市兵衛



三尾海高集



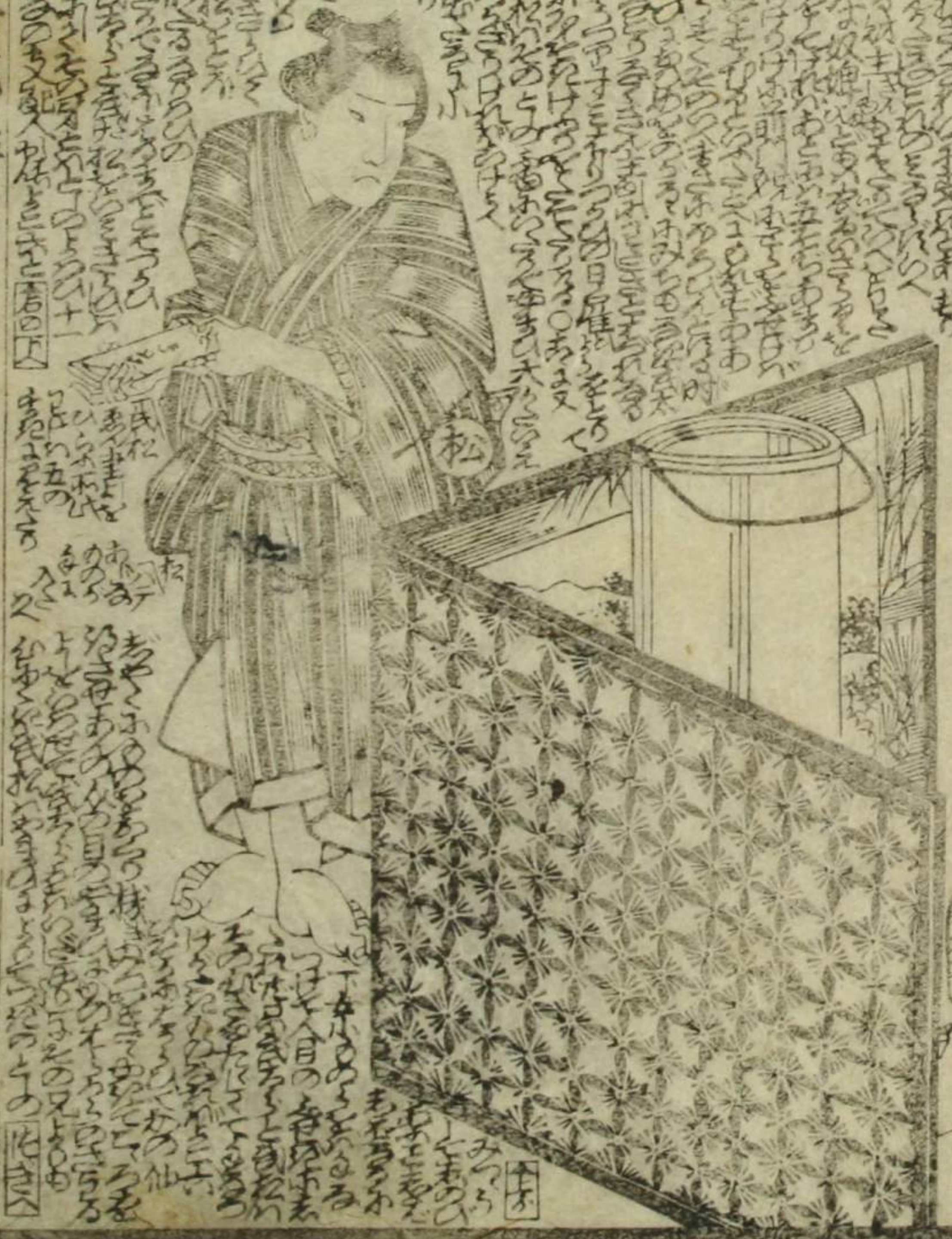




Vertical columns of handwritten Japanese text, likely a transcription of the novel's dialogue or narrative, surrounding the illustration on the right page.



Vertical columns of handwritten Japanese text, likely a transcription of the novel's dialogue or narrative, surrounding the illustration on the left page.



馬琴作

天保五年
甲午再板

帙上



小笠原貞人画

此の巻は... (Vertical text columns at the top of the right page, likely a preface or commentary.)

國女画 (Title of the illustration below)



馬琴作 (Large vertical text on the right side of the illustration, identifying the artist.)

金瓶梅第一集 (Text on the far right edge of the book, indicating the collection.)

新篇金瓶梅齋輯參

唐本金瓶梅の文字と按ずる原是西門啓の嬖妾なる一潘金蓮李瓶兒麗春梅ホニ淫婦の情態と七日と寫出せしむる個の啓の妾の多し一は瓶兒も亦その良人花子虛と氣死し後啓の妾の多し又春梅は西門啓死する後金蓮が與ふその奸を資けその身周統制の妻あるま及び又周義と密通したる毒思ふ淫婦の名を取て書ふ命する作音の正しく取と知る吾道新篇金瓶梅の著るはちの天満の聖唐の金瓶梅花の示現あり又金瓶寺老羅禪師の教化あり其間より又金瓶子野樵の說話るはちの著るはちの意の本つるをさるる柳是書四本ありてんせき欲はちの略と合巻の策子に考れば文辞とらるる盡さるるみづる撰懐とのまのま看官これとらるる馬琴再識

馬琴再識



あつたはちの著るはちの意の本つるをさるる柳是書四本ありてんせき欲はちの略と合巻の策子に考れば文辞とらるる盡さるるみづる撰懐とのまのま看官これとらるる馬琴再識



三巻 毎高 一三



三巻 毎高 一三



馬の首に掛る籠

七



白井村身一角

八



新編金瓶梅第二集

甘
白
芝
神

下
帙
下



曲亭馬琴著 每篇八弓合卷四冊辛卯魁本第一板

逆旅の留馬此は母子草榮枯あつる時小あひ
 隠憂究めく悪報あつ生死兩個の塚の町小
 此は是選馬黒市が苦樂別離乃前傳

新竹扁金瓶梅第一輯之四

丹精必神助あり瘞財一箇の瓶の内小
 誰が隠れ宅の黄金菊盛衰竊ふ得失の縁故
 此は是西門屋某が一時發迹乃縁故

歌川國安画 芝神明前甘泉堂和泉屋市兵衛印行



金瓶梅第一集

九

米賣場 西門屋

米賣場西門屋の物語... 西門屋の主人は、米を賣るに當り、先づ米の量を量り、次に米の質を確かめ、最後に米の味を確かめる。...



西門屋の物語

廿二

米賣場西門屋の物語... 西門屋の主人は、米を賣るに當り、先づ米の量を量り、次に米の質を確かめ、最後に米の味を確かめる。...



西門屋の物語

廿三

Vertical columns of handwritten Japanese text, likely a narrative or commentary, located in the upper left section of the left page.



Vertical columns of handwritten Japanese text, likely a narrative or commentary, located in the upper right section of the right page.



Small vertical text on the left edge of the left page.

Small vertical text on the right edge of the right page.

Small vertical text at the bottom right corner of the right page.



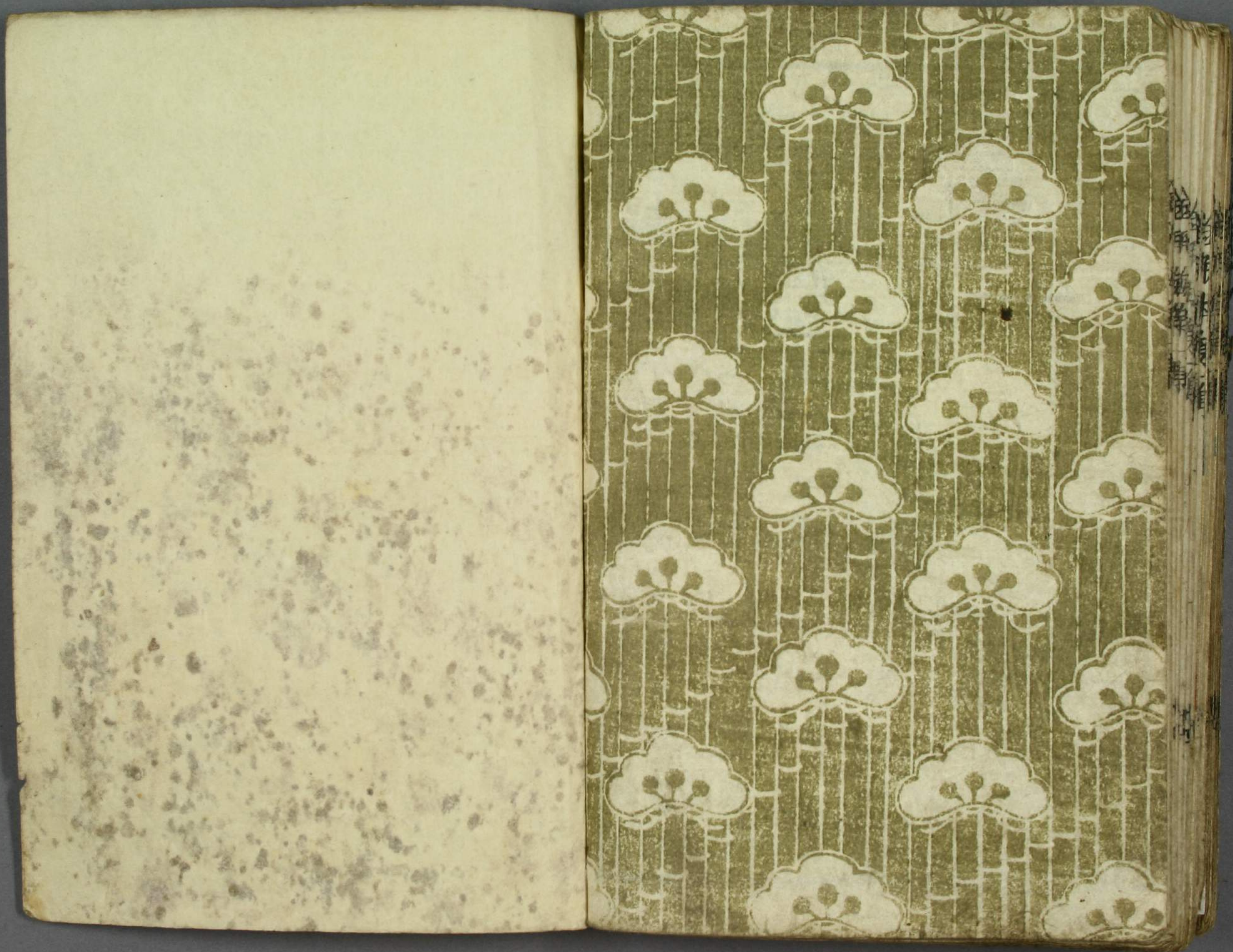
「文」文を長流るるをまじけ
 まるまはて二分のまをせ
 まくたるはねをのこるを
 らいとのいけのあまの
 らまのふくふくをけり
 れれりるるるるるるる
 ららららららららららら

「文」文を長流るるをまじけ
 まるまはて二分のまをせ
 まくたるはねをのこるを
 らいとのいけのあまの
 らまのふくふくをけり
 れれりるるるるるるる
 ららららららららららら
 「居宅」居宅のあつち
 「社」社にやまをまじり
 「中」中まじりまをせ



「文」文を長流るるをまじけ
 まるまはて二分のまをせ
 まくたるはねをのこるを
 らいとのいけのあまの
 らまのふくふくをけり
 れれりるるるるるるる
 ららららららららららら

「文」文を長流るるをまじけ
 まるまはて二分のまをせ
 まくたるはねをのこるを
 らいとのいけのあまの
 らまのふくふくをけり
 れれりるるるるるるる
 ららららららららららら
 「サカサ」サカサ（末）
 「サカサ」サカサ（末）
 「サカサ」サカサ（末）



目録
五
三